

## ウィリアム・ハズリットの「詩と真実」 — モンテーニュを友として —

### Truth and Poetry of William Hazlitt as a Friend of Montaigne

中川 誠

NAKAGAWA Makoto

---

**Abstract:** Not like Dr. Johnson who loved and excelled in talking, Hazlitt sat in silence and devoted his whole energy to writing, leaving after him the largest amount of essays in English literature. Hazlitt is known as a contemporary essayist and critic like Lamb and De Quincey, but not much known as the best writer of English language. He was different from all other English essayists in his love of Montaigne who made Hazlitt as we know. What difference is there? We shall see it in the following essay.

**Keywords:** William Hazlitt, Montaigne, Shakespeare, Edmund Burke, Samuel Johnson, ウィリアム・ハズリット、モンテーニュ、エドマンド・バーク、サミュエル・ジョンソン、人間研究、文章道、gusto

---

#### 序文

本論はモラリスト研究の焦点を 19 世紀イギリス・エッセイスト、文学批評家ウィリアム・ハズリット (William Hazlitt, 1778-1830) にしばって、彼の文章に見る特質とそれを書いた生身の人間ハズリットの理想と現実を考察するものである。ハズリットは文学・美術はいうまでもなく政治・社会・人物論にわたって、エッセイストとしてイギリス最大の多作家であり、書いたエッセイの数は数百に達する。107章のモンテーニュ『エッセー』の白水社版『随想録』が2,000ページであるとするれば、ハズリットは同型の版で1万ページを越えるであろう。ハズリットは其中で自分をありのままに語った。「私は私の全存在によって自分を伝える」(III-2)と言ったモンテーニュを、彼はエッセイストの師表と仰いだ。数多いハズリットのエッセイの中から本論の目的に沿ったものだけを少数取り上げることにする。それはモラリスト・ハズリットと、その反面、モラリストであることを根底から覆した運命の中で自分の心を書き綴った部分である。ここで言うモラリスト

とはなにか?

西欧モラリズムの概念は聖グレゴリーI世の「ヨブ記」解題、『モラリア』(*Moralia*)に発するとされている。しかし古典回帰のルネサンス期モラリズムは、プルタルコスやセネカの倫理論集の洗礼を受け、モンテーニュにその集大成を見ることになる。本稿はモンテーニュと関連してハズリットを扱うものであるから、モラリストの定義として、わが国のフランス・モラリスト研究家大塚幸男氏の与えた定義を引用する。

モラリストとは、人間をその日常生活において観察し、描写して、とりわけ人間の心理的動機を直感的に探究し、永遠に変わらない人間のあり方と人間の条件を示して見せ、それによって人間行動を矯正しようとの配慮ないし念願をうちに秘めている作家のことであり、究極のところ、言葉の最も深い意味において、人間いかに生きるべきかの問題を探究し、その問題に思いをひそめる人々のことである<sup>1</sup>。

これはフランス・モラリストについて述べたものであるが、本稿ではこの意味で「モラリスト」の呼び名を使う。フランス・モラリストの祖といわれるモンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne, 1533-92) の主著『エッセー』(*Essais*, 1580-88) が発端となって生まれたベーコン(Francis Bacon, 1561-1626)の『エッセイ集』(*Essays*, 1597, 1612, 1625)は無論のこと、ベーコンと並んでイギリス・エッセイ誕生の基を作ったカウレー (Abraham Cowley, 1618-67) の『散文と韻文によるエッセイ集』(*Essays in Prose and Verse*, 1681)も、両者に違いはあるにせよ、モラリストの文章であった。

次いで18世紀に入ると、イギリスにはアディソン (Joseph Addison, 1672-1719)、スティール (Richard Steele, 1672-1729)、ジョンソン博士 (Dr. Samuel Johnson, 1709-84)、ゴールドスミス (Oliver Goldsmith, 1730?-74)、ボズウェル (James Boswell, 1740-95) 等のエッセイストが輩出する。彼らのエッセイは時事的話題を取り上げながら、人間のあり方を追求するという意味で、これまた明確にモラリストのものであった。

これを受けて19世紀はイギリス・ロマン派の全盛時代を迎える。そこに活躍したエッセイストに、ラム (Charles Lamb, 1775-1834)、ハズリット、そしてハント (James Henry Leigh Hunt, 1784-1859)、ディ・クウィンスイー (Thomas De Quincey, 1785-1859) 等がいる。彼らがイギリス・エッセイ文学の黄金時代を築いた。中でも父子・孫三代にわたってモンテーニュに傾倒したハズリットこそモンテーニュの直系であり、前掲の意味でのモラリスト精神を受け継ぐ代表的イギリス・エッセイストと言うべき人物である。

---

<sup>1</sup> 『フランスのモラリストたち』(白水社、1967)、p.14.

ハズリットに顕著なモラリスト精神とはいかなるものであったのか？ 手始めに、その系統の先駆者であったモンテーニュをはじめ、ラ・ロシュフコー(Francois de La Rochefoucauld, 1613-80)、そしてイギリスのベーコン等の文章の中にそれを垣間見ておこう。

モンテーニュは、「善の意識を持たない者にとっては人文学以外の学問は有害である」(I-25)<sup>2</sup> と言っていた。ルネサンス人モンテーニュの心 にあった人文学は、西洋古典の文学と思想であり、それが目指す人間の幸福追求の学問であったと考えられる。ローマの風刺詩人マルティアリス (Martialis) が言ったという、「貧しい紙の虚しい虚構が君にとって何の助けになろうか？ 人生が "Meum est" (これ、わがものなり) と言いうるもの、君はそれをこそ読むべきだ。われらのページは人間を表示するのだ」<sup>3</sup>の言葉に集約されるような、人間性追求への激しい情熱と自覚に裏付けられた学問のことである。その目的は、人間の幸せはいかにして可能かを追求することである。そしてここに言う「善」とは、英語の"goodness"に該当するが、それをベーコンは次のように定義した。

I take goodness in this sense, the affecting of the weal of men. Goodness I call the habit, and goodness of nature the inclination. This, of all virtues and dignities of the mind, is the greatest, being the character of the Deity, and without it man is a busy, mischievous, wretched thing, no better than a kind of vermin.<sup>4</sup>

「私の考えている善良ということの意味は人々のしあわせを目的とするということである。・・・善良ということを私は習性といい、性質の善良ということは性向といいたい。これは心のあらゆる徳性や高貴性のうちで最大のものである。神の特性だからである。そして、それがないと人間は、おせっかいで、悪事をやる、みじめなものになる。一種の有害動物だといってもよい。」<sup>5</sup>

さらにベーコンは、善に向かう性質は人間に深く刻み込まれているが、悪をも目指しうる人間性の中で善は希有の美德といわねばならぬと言っている。たしかに、もしも善への傾向と可能性を万人が等しく共有するならば、人の教化改善の道も現実のそれよりはる

<sup>2</sup> モンテーニュ『エッセー』第一巻二十五章のこと。以下これに従う。

<sup>3</sup> 前掲、大塚幸男『フランスのモラリストたち』pp.11-12

<sup>4</sup> "Of goodness, and Goodness of Nature" *The Essays of Counsels, Civil and Moral of Francis Bacon*. Samuel Harvey Reynolds ed. (Clarendon Press, Oxford, 1890), p.85.

<sup>5</sup> 成田成寿訳『ベーコン』(中央公論社, 1970)、p.98.

かに容易なはずであるから、ベーコンにしても、青少年の精神向上と育成のためにわざわざ彼の『人倫道徳のエッセイ集』(*The Essays of Counsels, Civil and Moral*)を書く必要はなかったかもしれない。

しかし一方では、「我々の美德は、ほとんどの場合、偽装した悪徳にほかならない」というような文章を自分の箴言集の巻頭言としたラ・ロシュフコーに特に著しい、悪への傾向こそ人間の本性であるという人間観の、いわば深い嘆きの淵の底から、西欧モラリストの群像と彼らの箴言とエッセイが誕生したのである。そこには古典に流れる「空の空なるかな、すべては空なり」("Vanity of vanities, all is vanity")の旧約的人間観が充満している。ハズリットは、"Vice like disease, floats in the atmosphere." (*Characteristics*, No. 144)「悪は病いのように大気を浮遊する」(『箴言集』144)、さらに"Vice is man's nature: virtue is a habit, or a mask." (*ibid.*, No. 417)「悪こそ人間の本性である。美德は一つの風習、もしくは仮面である」と言った。

ラ・ロシュフコー的な人間観は、一方では、善を指向する理想主義を生む母体となることもまた否定できない。厭世的な箴言を多く書いたモンテーニュとラ・ロシュフコーに傾倒して自らも箴言を書き、エッセイストになったハズリットも、ある意味では情熱的な理想主義者であった。

モンテーニュによってフランス・モラリストを知り、その精神を自分のものとして批評活動を行なったハズリットをモラリストと呼ぶことに異論はあるまい。ただし、ルネサンス期に生きたモンテーニュと違ってハズリットはイギリスのロマン主義期の人であった。イギリス・ロマン主義時代はいつのことを指すのかは諸説があるが、少なくともハズリットは『時代精神』(*The Spirit of the Age*, 1825)の中で、新しい時代はフランス革命に始まると言った。シェリー(Percy Bysshe Shelley, 1792 - 1822)がバイロン(George Gordon Byron, 1788 - 1824)に、「フランス革命こそ、われらの時代の最大のテーマだ」("the master theme of the epoch in which we live.")<sup>6</sup> と手紙に書いたことや、ワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)とコウルリジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)の『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads*)企画が革命勃発の1789年であったことも既によく知られている。11歳で革命の洗礼を受けたハズリットは生涯、自分を革命の子であると考えていた。同じ革命の子であるナポレオンに対する尊敬の念やみがたく、積年の胃病による衰弱しきった体で仕上げた『ナポレオン伝』(*Life of Napoleon*, 1828-1830)が彼の最後の大作となる。この完結と出版を聞いて彼は死んだ。1778年に生まれて1830年に没した彼はワーズワス、

<sup>6</sup> cited. Thomas McFarland, *Romantic Cruxes* (Clarendon Press, Oxford, 1987), p.1.

コウルリジ、ラム、バイロン、シェリー等、イギリス・ロマン主義の黄金時代を飾る詩人作家達の同時代人であった。のみならず彼ほど幅広い分野にわたって評論活動を行い、それによってこの時代思潮を的確に我々に伝えた者はいないという意味でも、われわれはハズリットを典型的ロマン派と呼ぶことができる。

本稿の目的は第一には、このロマン派ハズリットが、他の仲間達の話題にも登らなかったフランス・モラリストたち、特にモンテーニュにいかにか強く惹きつけられたのか、そしてこの仏人モラリストに源を発する近代エッセイストの伝統をいかにか受け継いだのか、その中でも特に顕著な、的確にして簡潔明快な文章実現を目指す彼の執念はいかなるものであったか、同時に、その薫陶を受けながら自らも人生の観照者、人間性探究者として何を書いたのか、を考察することである。第二には、その精神の軌跡をたどる一方で、実人生の中でハズリットに際立った特質がどのように現われ、それが彼の文学にいかにか昇華したかを見ることである。そこに登場するのは、ロマン派研究者になじみの、絵画と文学に優れた洞察と鑑賞眼を発揮した実践的批評家ハズリットではなく、その奥にあってそのような洞察を可能にした人間ハズリットである。

ハズリットが生まれ育ったのは18世紀末のことであった。古典に根ざしたモンテーニュ的な自然随順と安寧秩序の思想がまだ生きていた。しかし、世紀末のフランス革命は人間活動のあらゆる面で人類未曾有の大変革をもたらすものであった。前途には未知の暗黒しか見えなかった。その不安を体現したロマン派文人たちの旗頭となったのがハズリット後半の人生である。それは安寧秩序と自然随順とは裏腹の刹那主義、厭世主義の人間観と、逆に前世紀の古典尊崇に対する強い郷愁であった。本稿を書くにあたって、モンテーニュとハズリットの関連を論じた文献を参考にしたかったが、それは皆無であることを知った。本稿を通して、エッセイスト・ハズリットを導いたモラリストにしてエッセイスト・モンテーニュとの両者の関係を明らかにして、エッセイのあり方を追究したい。そのことが識者のエッセイ文学研究に役立つならば、論者としてそれ以上の喜びはない。

最後に本稿の趣旨と、執筆の動機を述べておく。筆者がジョンソン博士、アーノルド(Matthew Arnold, 1822-88)、カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)等のエッセイを読んでいた頃、モンテーニュ研究家関根秀雄先生と知り合い、この仏人モラリストとイギリス文学との関係に興味を持つようになった。やがてモンテーニュ紹介者としてハズリットが大きな役割を演じていることに気付いた。ハズリットをモンテーニュの弟子(disciple)として言及することは稀に散見されるが、両者の関係を本格的に扱った文献は皆無であることを知った。日本では言うまでもない。その関係を問うことが本論の趣旨である。モラリスト・ハズリット研究は人間ハズリット研究にほかならない。モラリストとは単なる道

学者のことではなく、道を求めながらも、生身の人間として避けることのできない煩悩の世界に生きた人々のことであった。モンテーニュはもちろん、ラ・ロシュフコーまたしかり、そしてロマン派ハズリットにいたっては、その実人生たるや激情に翻弄された直情径行ともいふべき軌跡であった。彼は日記も自伝も残さなかった。彼の膨大な分量の文章が彼の本命を正直に語っている。モンテーニュの『エッセー』もまた同様であった。気高いモラリストでありながら、おどろおどろしいまでに低く地を這った一人のイギリス文人の人生が持つ意味を明暗こもごも描ききってみたかった。表題の「詩と真実」は言うまでもなくゲーテから取った。古典を愛したイギリスのロマンティシストの「理想と現実」に、ゲーテの遍歴を連想したからである。

(なお、本論は、筆者の博士論文の「序文」を要約したものである)